

# ギンザケに貧血を起こす原因ウイルスを解明

成長が早くておいしいギンザケの養殖は、宮城県沿岸などで盛んに行われていましたが、東日本大震災で大きな被害を受けました。また、正体不明のウイルスが原因で貧血を起こし死に至る赤血球封入体症候群（EIBS：Erythrocytic inclusion body syndrome、写真）も発生し、大きな影響を受けています。ギンザケ養殖の復興のためにも、この病気の解明が求められています。

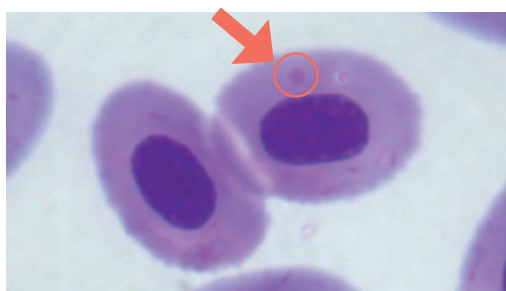


写真 ギンザケ赤血球内の封入体（→）  
封入体はウイルス粒子を高密度で含んでいます  
（写真提供：宮城県 熊谷 明博士）

水産研究・教育機構は宮城県と協力し、EIBS原因ウイルスの研究を進め、ついにウイルスの正体をつきとめました。EIBSにかかったギンザケの赤血球から原因ウイルスを精製し、その全ゲノム配列を決定できました。このウイルスをピシソールソレオウイルス2（PRV-2）と命名しました。さらに、EIBSにかかったギンザケの診断のため、ゲノムからPRV-2のタンパク質を合成し、これをもとにウイルス感染や過去にウイルスに感染したことがあるかを鋭敏に検出する方法を開発しました。

現在、PRV-2のタンパク質を成分とするワクチンの開発も進め、EIBSを防ぐ技術の確立を目指しています（図）。

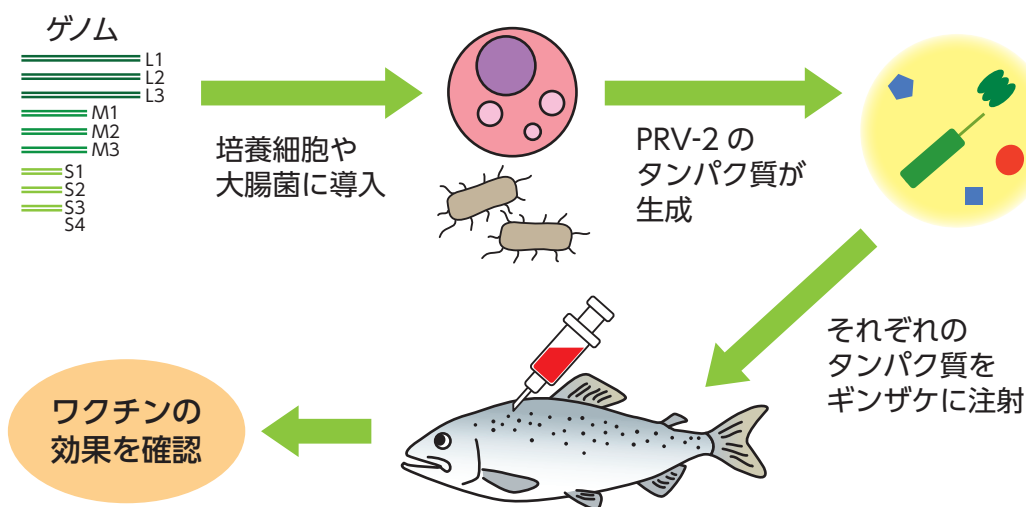


図 遺伝子組み換え技術を利用したEIBSに対するワクチンの試作

※この成果は、農林水産技術会議委託事業「サケ科魚類養殖業の安定化、省コスト・効率化のための実証研究」によるものです。